

三山夕子さん死去

おいしさをありがとう

仙台文学館のレストラン「杜の小径」... 三山さんは文学館の開館以来16年間、文学館と共に歩んで来た。



は紹介しきれないほどだった。啄木の時は岩手や函館へ出かけてアイデアを練った。宮沢賢治展では花巻へ行くこと3度... 山芋など出身地・花山の特産品料理やハゼの仙台雑煮も大好評だった。

私と郷土と文学 ⑥

私は愛媛県松山市の出身だが、寛政年間に二度も、小林一茶が来松しているという...

伊子松山と一茶の「松」

「松」というのは、「姿形がわるい樗のような無用の大木も、広い場所に植えれば、その陰で人が憩える」という...

「私と郷土と文学」の原稿募集 約600字で会員のみなさまの原稿を募集します。

文学の杜

仙台文学館 友の会会報

第48号

平成27年7月30日発行



28年度から会費500円値上げ

友の会総会 自由討議では全員発言

仙台文学館友の会の平成27年度総会は5月10日、文学館で開かれたII写真II...

事務的な部分は、友の会事務局の伊藤美菜子さんが司会、会長の渡辺祥子さんが挨拶II別項IIの後、議長に就いて進められた。

輝く文学の言葉

渡辺会長あいさつ

春になるといつも思い出すのが、染色家の志村ふくみさんが、桜染めについて書かれた文章です。

200人の会員と10人の賛助会員を予定し(26年度は各194人、10人)、繰越金と合わせて45万余円の収入規模。支出は会報発行23万余円、通信費20万円が主なもの。

友の会のサポーター募集

友の会ではサポーター活動を導入して会の活性化を図っています。現在6人が参加しています。

文友の部屋

映画「愛を読むひと」の後半は法廷劇の様相を呈し、主人公の女は有罪になる。長い服役を終えるころ、中年になった、かつての男が女に会いに来る。

「文友の部屋」の原稿募集 150字以内で、会員のみなさまの声をお寄せください。

友の会にエネルギーと知恵を注いでください。応募は随時。事務局に申し出て下さい。

編集後記

仙台文学館友の会会報「文学の杜」第48号をお届けします。最近、病院通いが増えた。整形外科、循環器科...

▽ケットを手にしてから、はやくはやくと待ち望んだ「1000人のチェロ演奏会」。

▽庄内の人は「だし」を食べないと聞いていて郷土料理について考えた。納豆餅、だし、ずんだ、それからヒョウに孟宗汁、そうか食にも方言があるんだな。

文友一滴

以前本屋で立ち読みした女性ファッション誌に、亡きフランスの作家マルグリット・デュラスの書斎の写真とインタビューが載っていた。...

いつもそこにある危うさ

第20回読書会 庄野潤三「静物」



前回に引き続き読んでいるの庄野作品である。

一匹の赤い金魚が、窓に置かれたガラス鉢の中で泳いでいる。

外国のニュースを家族に聞かせる父親。伯父さんから貰ったクルミの話をする5年生の女の子。チンドン屋が来た時の男の子の様子。授業中に先生の入れ菌がはずれてしまった話。部屋の中に巣を作った糞虫のこと。

18章からなるこの作品には、3人の子ともが、家庭の、何気ない日々の生活の様子が淡々と描かれる。父と子の会話に清々しさを感じたと言う人もいた。

しかし、この家にはあ

友の会随想



生が好き。見るのも、聞くのも、食べるのも。千駄木にある森鷗外記念館の特別展「谷根千寄り道文学散歩」を見に行ってきた。作家の自筆による生原稿に接したいとおもって。私は本の背表紙を見てみる。

な気分にな

れる。そのうち中でのぞきたい。読んでみたら中に書いてあるこの地名はどこ？

書いた人の顔をみた

い、生原稿も拝みたい。どんな私生活だったのかなどと思いは膨らむ。

今回は鷗外記念館に行つて、作品にまつわることや樋口一葉を評価したこと、家族のことなど、彼の生き方をもう知った。有り余る才能を開花させ、自宅を観潮楼

本でつながる、本がつなげる

友の会会員 一文字 ひろみ

と名づけ、文人達がここに集い、技を磨いてきたサロンなのだ。

展示をみているうちに彼の作品「青年」を読みたくなり売店で文庫本を求めて周辺を散策した。作品の中にある地名がそのまま残っているのだ。あの作品のあの部分がかこなんだ「発見！」みたいなところが多くある。歩きながらタイムスリップしたようでいて、新鮮で不思議な時間をすごした。懐かしい町名が少なくなつてしまった仙台とは大違い。東京都の中心に近い谷中、根津、千駄木などの文の京(文京区)は下町風情を味わえるのだ。近代文学が花開いた地として文学

散歩スポットは多い。谷中は天王寺、根津は根津神社、千駄木は観潮楼に焦点を合わせて文学作品や文人たちを紹介していた。

作品から地名がつながりワクワク感はある。否が応でも高まる。はじめからつながることを求めて歩いているのではないが結果としてそうなる。それが私なりの発見であり喜びにもなる。

森つながり

で「鷗外の坂」を書いた森まゆみさん。地域雑誌「谷根千」のナンバーが並べてある旧安田邸の売店でお会いした方は、偶然にもまゆみさんのお母様であった。森、森、森つながりで丸森の話まで。こうして本はつながる。本がつなげる。人までも。

不思議な世界に誘われる

第21回読書会

小島 信夫「馬」

6月10日の読書会は参加者14名。これまでで最多の人数であり、活発な感想が飛び交い、文学館の窓の緑と相まって活き活きとした読書会になった。

主人公、僕は精神疾患のある人で、僕の独白の形で小説は進行する。僕が知ら

ないうちに家が改装され、あけくまに馬を預かるようになる。すべてのは妻が決めていることなのだ、という。その現実なのか空想なのか判然としない展開に、読者は不思議な世界に連れて行かれる。僕は結婚前に妻に「愛の告白」をしたことに負い目を感じている。そのころの内面が家のことや馬のことになるら

投げかけている。

色彩の無い作品という鋭い発言もあつたように、ガラスの金魚鉢の危うさと共に、読み手の思考を促す作品だった。

4月8日、新会員1名を迎え12名の参加。

(佐)

次回読書会は10月14日(水)14時。レイモンド・カーヴァー「ささやかだけれど、役にたつこと」。村上春樹翻訳ライブラリー「大聖堂」(中央公論新社)、もしくは、「レイモンド・カーヴァー傑作選」(中公文庫)所収。

※友の会会員は自由に参加出来ます。申込は事務局へ。TEL 271(3020)

7月7日、バスは定刻に発車した。見学先は尾花沢市「芭蕉清風歴史資料館」と大石田町「大石田町立歴史民俗資料館」。旅程の楽しみは大石田そば街道の蕎麦の昼食と最上川千本団子のおやつ、道の駅・天童でのお土産探しだ。

往路恒例の自己紹介は「7が好き」で始まり、7月10日の仙台空襲を思うなど、参加者の個性が際立った。「奥の細道」尾花沢、立石寺、最上川の章段と、大石田での茂吉についての解説を聞く。

施設見学会

尾花沢・大石田で芭蕉の旅しのぶ

斎藤茂吉の疎開先も訪問



芭蕉清風歴史資料館前での記念撮影

しゃべりを楽しみ大石田へと向かう。

「大石田町立歴史民俗資料館」は茂吉が昭和21年2月から22年11月まで疎開していた聴禽書屋に隣接している。展示品について学芸員から詳しい説明を受けた。聴禽書屋、大石田での茂吉の暮らしぶり、好物の鰻のエピソードなどを聞く。棧橋を小脇に抱え、藁沓を履いて散歩する茂吉を、町の人は「たらばしずんつあん」と親しみを込めて呼んでいたそう。そんな話を聞いてから、背を丸くして最上川河畔に座る茂吉の写真を再度見た。そこには歌作に苦しむ、厳しい孤独な老歌人というだけではない、穏やかな時間もあつたのだと感じられた。

出発してから大石田までの間「最上川」と何回聞いただろう。芭蕉と茂吉にとって、最上川がどれほど大きな存在であったか参加者は感じ取っていた。それなのに車窓にはまだ一度も最上川は姿を見せていない。運転手さんの好意で最上川に沿った道を通る。最上川が見えたとき、バスの中は静かに興奮した。これが見学の醍醐味なのです。(和)

題は「手」または「車」

第18回ことばの祭典



選者による講評

仙台文学館主催の、第18回「ことばの祭典」短歌・俳句・川柳へのいざないが6月27日開かれた。応募作品数は、短歌部門86点、俳句部門95点、川柳部門86点(シゆ)または「車」(くるま、しゃ)。賞はことばの祭典賞、選者の特選・秀逸・佳作、参加者が選ぶあじさい賞。小池光館長賞。

《ことばの祭典賞》

- ◆短歌の部 関上の浜で漁師をしたる父節高き手を我は愛せり 紺野みつえ
- ◆俳句の部 入梅ややさしい魔法のやうな手話 工藤玲音
- ◆川柳の部 バトカーの赤色灯が嬉しそう 中島稔

- ◆小池光館長賞
 - ◆短歌の部 遠ざかるデイスリーブの車窓から百合揺れること母は手を振る 三浦真弓
 - ◆俳句の部 梅雨滂沱少年の手をあふれけり 齋藤伸光
- ◆川柳の部 手を洗うさあ母さんの塩むすび 國分郁子

- ◆特選、秀逸、佳作、あじさい賞の受賞者は次の人たち。
- ◆短歌の部
 - ▽梅内美華子選(特選)鎌倉道彦(秀逸)後藤ゆかり、渡邊とり(佳作)太田良喜、菅野實、森下美智子、渡辺不二夫、伊豆田勝一
 - ▽佐藤通雅選(特選)後藤ゆかり(秀逸)小野正光、太田良喜(佳作)中島稔、佐藤廉、小林恵子、菅野實、佐藤啓子
 - ▽あじさい賞 小野寺寿子
- ◆俳句の部
 - ▽神野紗希選(特選)草野志津久(秀逸)佐藤廉、中村春(佳作)加藤百合子、坂内佳彌、荒木那智子、佐藤隆貴、浅野大輝
 - ▽高野ムツ才選(特選)平山北舟(秀逸)佐々木智以、佐野久乃(佳作)後藤ゆかり、加藤鈴枝、月波与生、佐々木和子、浅川芳直
 - ▽あじさい賞 月波与生
 - ◆川柳の部
 - ▽津田暹選(特選)佐藤恵子(秀逸)佐藤隆貴、阿部堅市(佳作)千葉フミ、山田純一、木田比呂朗、佐藤久嘉、鈴木悟
 - ▽石隆子選(特選)鎌田一尾(秀逸)佐藤明、林静江(佳作)佐藤隆貴、日野光雄、佐藤穂、佐藤久嘉、小田島渚
 - ▽あじさい賞 菅野實

今年も、友の会サポーターが、裏方スタッフとして、ことばの祭典に参加しました。受付での短冊配布、あじさい賞用の作品貼り出し、みなさまから投票いただいた用紙を回収しての開票作業など、一日、文学館職員とともに、イベントの裏側を支えました。